

開発をめぐるローカル言説の形成：インド女性開発 集団・SEWAの事例を中心に

喜多村，百合
九州大学教育学部

<https://doi.org/10.15017/2320117>

出版情報：九州人類学会報. 24, pp.32-45, 1996-12-01. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：



開発をめぐるローカル言説の形成 —インド女性開発集団・S E W Aの事例を中心に—

喜多村 百合

1. はじめに

開発に対する人類学者のこれまでの態度は、端的にその内と外、つまり開発内部における応用人類学者としての立場か、あるいは外部にいてオーセンティックな「ネイティブの視点」の擁護を貫く立場に對置されるものであった。

この分離した研究傾向に対し、開発現象の普遍化・多様化に伴い'90年代前後より両者を結合しようとする新たな視点が提出されつつある。エスコバル [Escobar 1991, 1995] は戦後顕著になる国際開発協力諸機関や国家主導で構築される言説としての開発主義を批判し、それに対抗するローカル運動や代替型開発の発生・展開を示すことで、文化的闘争およびアイデンティティ形成のオープンエンドな「交渉の場」として機能する「開発」を論じている。

またダールやラボ[Dahl&Rabo 1992]は、「開発」や「近代」についてのローカル概念の多様性を示し、その形成プロセスが単線的な西洋志向的エージェントだけではないという点を明かにしたうえで、対象社会の成員の言説としての「開発」「近代」概念の内面化過程¹への着目の重要性を指摘している。

本稿はこのような議論に基づき、独自の代替型開発・社会改革運動を推し進めるインドの女性開発集団 S E W A (Self-Employed Women's Association) の活動を、これまで不当に看過されてきた当事者の語りを中心に考察する。開発主体による S E W A の開発実践の意味付けや内面化の過程を踏まえ、その特性や問題性を分析するものである。これらを踏まえた上で、これまで的人类学において忌避されてきた「開発」が、やはり無視されがちであった「ジェンダー」の視点を含めた考察を通して、文化が解体し再構築されるまさにその「交渉の場」となり得ることの例証を試みる。

2. 開発言説としての S E W A 運動の位置

開発を人類学的に論じてきたエスコバルは、開発現象を欧米先進諸国を中心に生じた、ポストコロニアル期以降の新興諸国家との新たな政治・経済的関係を構築する言説として捉えている [Escobar 1995]。その言説は、西欧近代を発展モデルに掲げる近代化論を中心とするもので、東西冷戦構造という国際的政治状況に支えられるものであった。

言説において、対象は常に権力と結び付いた表象をされる。言説としての「近代」とは、固有の価値や規範を持つ諸文化を西欧近代の知識体系で一律的に特徴づけようとする、ある種の暴力的機能を持つものであった。その語りには、新興諸国家は西欧近代を目標に「発展」「進歩」するものという進化論的レトリックが用いられた。また資本主義が浸透する過程は「強力で優越的な男性である西洋が弱く受身的（かつ女性的）他者を魅惑する」ような性的メタファーで語られた [Hobart 1993:7]。

このような「西欧近代」を基準に発展到達度を計ろうとする開発言説は、西欧以外の諸文化をも表

象として序列化する要因となった。そして「低開発」が問題として顕在化され、専門化し、制度化される過程で、「第三世界」「貧困」あるいは「発展途上国」といった序列概念が作られ全世界的に普及したとする [Escobar 1995:21-54]。

しかしこういった言説形成は戦後突然生じた訳ではなく、すでに植民地支配期にそれが醸成される土壌が培われていたといえる。そして「後進的な伝統と民間信仰の呪縛」から民衆を解放しようという「人道的使命」(White men's burden) と、一方で宗主国の経済発展を支える功利主義的目的を果たすべく、歪んだ部分的近代化が行われた点は否めない。その意味で、植民地支配と戦後の国際開発に用いられる政策には、言説としてのアナロジーがあるといえる。コロニアル言説批判の主要な議論としてバーバを引用するなら、それは「言説として理論的に最も低開発な形態をとりながら、人種的文化の序列化の言說的・政治的実践をもたらす一連の差異と差別の構築に決定的役割を果たした。」 [Bhaba 1990:71-89] のである。

国際開発パラダイムにおける数々の修正策²は、そのような近代化論に裏付けられた開発言説の有効性の限界の一部を明らかにしている。このような言説としての「ほころび」が開発現場で露呈するのは、まず開発の周縁に追いやられていた女性の労働においてである。

国際開発において女性労働が不可視化される過程を、筆者は修士論文で論じた [喜多村 1993]。その主要因として、開発政策の背後に西欧近代的な性役割観があり、積極的な生産の担い手である途上国の女性の現実を無視している点が指摘された。またその萌芽的段階として、植民地支配期に同様の政策が施行され、女性の生産労働が軽視されていく過程が指摘されている [Etienne & Leacock 1980]。

このように、女性に負の影響を与える本流の開発パラダイムを批判する概念として出現したのがWID「開発と女性」であり、労働概念において周縁化されていた途上国の女性の活発な生産活動を可視化し、開発の担い手としての女性の重要性を唱えた。その後の国連における「国際女性年(1975)」の採択とそれに続く「国際女性の十年」の制定以後、女性を取り巻く生活環境について様々な研究と施策がなされ、「女性労働の可視化」³において一定の成果を見たと言えよう。

しかしWIDに関しても、制度化されるなかで欧米モデル中心の言説が支配的になる過程が指摘され始めた。それは西洋近代の対立的かつ女性従属的なジェンダー関係の枠組を、第三世界的女性に無条件に充当する点であった。その結果、初期にみられた「欧米中産階級の主婦」モデルを押し充てようとした古典的な開発理論を置換したのは、制度的平等の達成を急ぐ欧米フェミニズム理論であり、それにより途上国の女性が攻撃されるという、当初のあり方に矛盾する傾向が明らかになってきた。

第三世界的女性達が、欧米フェミニズムによって表象される様をモハンティは次のように述べる；
『平均的な第三世界的女性は、その女性性に基づいた第三世界性（無知、貧困、無教養、伝統に縛られ、家族志向的で犠牲的な存在）により不完全な生活を送っている。』これが示唆するものは、西洋女性の教養のある、近代的な自己表象以外の何物でもない。 [Mohanty 1991:56]

またミンハはアイヴォリーコーストの女性の言葉を引用しながら同様の傾向を指摘している；

「本来、純粋な西洋の歴史プロセスから生じたはずの諸問題やその解決を、またある種の組織をアフリカにも移してこようとする、その考え方を私たちはただ苦々しく思う。女性の権利を推進しようとする組織は、当然のようにアフリカにその活動の場を広げてくる。そうやって私たちを、厳密にヨ

ヨーロッパ人のものでしかない心性や歴史体験に、完全に同化させようとするのだ。アフリカの女を劣ったものと描いていないものは、ほとんど無い。」[Minh-ha 1995 (1989):177] ⁴

これらに顕著に現れる姿勢は、第三世界の女性に対し欧米の基準を暗黙の内に行使しようとする欧米フェミニズムの家父長的な態度である。その家父長制こそ、皮肉にも彼女らが女性解放運動の中で排除しようとしてきた概念そのものである。

このような議論に反発し、女性を単に開発に統合するだけでは不十分であり、途上国の女性の現状に見合った開発実践の遂行が、DAWN⁵など第三世界の女性開発ネットワーク集団を中心に唱えられた。その手法はエンパワーメントアプローチと呼ばれ、女性が経済的・社会的に力をつけ開発のあり方の決定をする点を強調するものである。

このエンパワーメント手法の一つを例証しているのが、DAWNの中心的存在でもあるSEWAによる開発諸活動である。本稿では、草の根型開発を進める女性開発集団SEWAの活動を、言説という側面に注目しながら考察する。

3. SEWAの活動理念と組織構造・運営上の諸特徴

(1)「インドの開発パラダイムにおける女性労働の取り扱い」

インドは独立後、発展途上国の中ではいち早く計画経済に着手し、「経済成長の推進」と「社会的公平の達成」を基本理念に、重工業化を中心とする社会主義型社会建設の開発を実践してきた。しかしこのような経済開発の過程で、必ずしもその恩恵を受けない貧困層の女性の窮状が明らかになるのは、'70年代中盤になってからである。

国連の「国際女性年」指定を契機になされた実態調査結果[G.O.I. 1974] ⁶を踏まえ、1981年の国勢調査で、それまで労働者として認識されにくかった女性の大多数が、「周縁労働者(marginal workers)」として初めて可視化された。しかし貧困女性の問題は、政策上、一般的な貧困関連問題に包摂されており、女性をターゲットにした政策形成は第6次計画を待たねばならなかった。

第6次計画は、年次計画導入以来初めて「開発と女性」に関する章を設け、女性向けの特定プログラム7を提示した。その強調点は、保健と家族計画を伴う女性の経済的自立であった。しかしこの種の改善プログラムが完全に軌道に乗る前に導入された1991年の「新経済政策」は、貧困層の女性に対し更に負の影響を与えるという女性団体の予測がなされている。

(2)「アフマダーバード市の概要と産業状況」(図1) ⁸

同市(人口370万)は、歴史的には'1920年代から30年代にかけて、民族指導者ガンディーによる反英独立運動の拠点となったことで知られている。産業史的には16世紀後半ムガル朝の支配下で、宝石貴金属、木彫り、絨毯などの手工業、また在地・域外交易で栄え、これらの手工業は今日でも伝統工業として残存する。19世紀後半、地元資本による紡績工場が建設され、以後綿業都市として発展し「インドのマンチェスター」と呼ばれた。かつて同市には66箇所の繊維工場が稼働しており、15万人以上の労働者に安定した雇用を供給していた。しかし効率悪化を理由に'70年代に開始された合理化は、非組織化部門の労働者の増加に拍車をかけ、特に補助労働と見なされがちな女性労働は、調整弁として容易に労働市場から排除される状況にある。

(3)SEWA(女性自営者協会)

Ahmedabad City and its
peripheral area

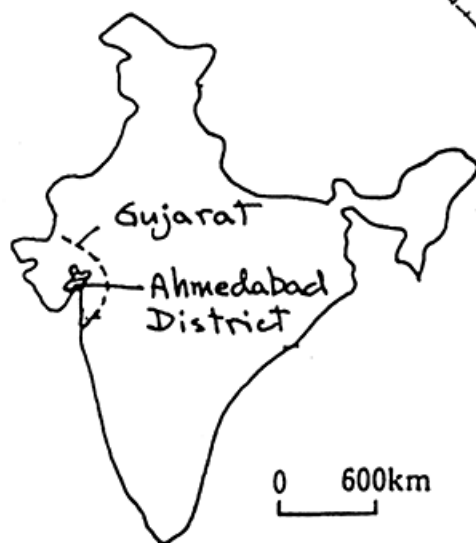
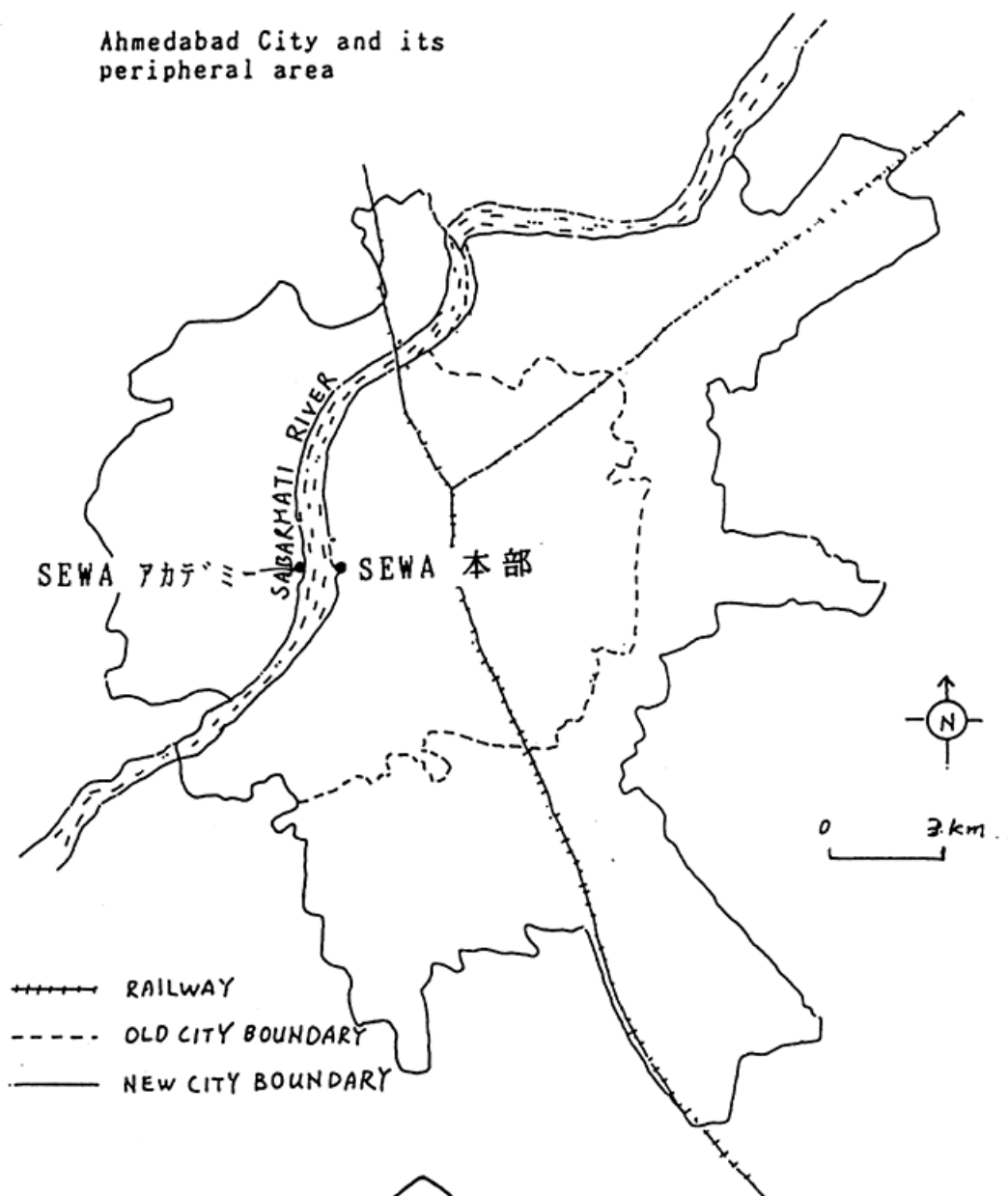


図 1

SEWAは同市に1972年、弁護士エラ・バットの指導のもと非組織化部門の女性労働者を主要メンバーとして設立された労働・協同組合である。当時進行していた都市化事業で、排除の危機に直面していた露店商や、仲介斡旋業者から搾取されていた伝統的手工業者および雑業層の女性が生業を守るために組織化したものである。

その活動理念を、SEWAはガンディ主義に求めており、西欧の産業化社会をモデルとせず、民族固有の産業を基盤とした発展と女性の地位向上を目標とした社会改革を目指すものである。その意味で、SEWAは自らを、労働運動、協同組合運動そして女性運動を合わせた合同運動体（Sangam）として位置づけている。

現在会員数は218,797名 [SEWA 1995] で、今回筆者が調査をした都市部会員の職業は、ビディ（代用タバコ）巻きなどの家内職、紙屑拾い、農場や建築現場での日雇い労働者、古着や野菜の行商・露店商などがその主だったものである。会員のカーストは、下層ヒンドゥー、ダリット（Dalits：指定カースト）・アディヴァシ（Adivasis：指定部族）、ムスリムがほぼ三分する形で構成され経済的に最貧層を形成する。

その活動内容は労働組合、協同組合、支援事業、農村開発に分かれ、現在35の職業別組合、70協同組合、農村部における80のDWCRAGループを組織化している。支援事業には、SEWA銀行⁹による融資と貯蓄、保健衛生、保育、識字、住宅援助、法的支援、職業研修が含まれる。（図2）最高意思決定機関は常任理事会にあり、オーガナイザーと組合員代表による共同決定方式でSEWA活動の意思決定が行われている。理事会には組合から比例代表で20名が選出され、これにオーガナイザー5名が加わる。（図3）ただし1986年より、規模拡大と協同組合の効率化を図るため、大量の高学歴スタッフが専従職員として採用されている。

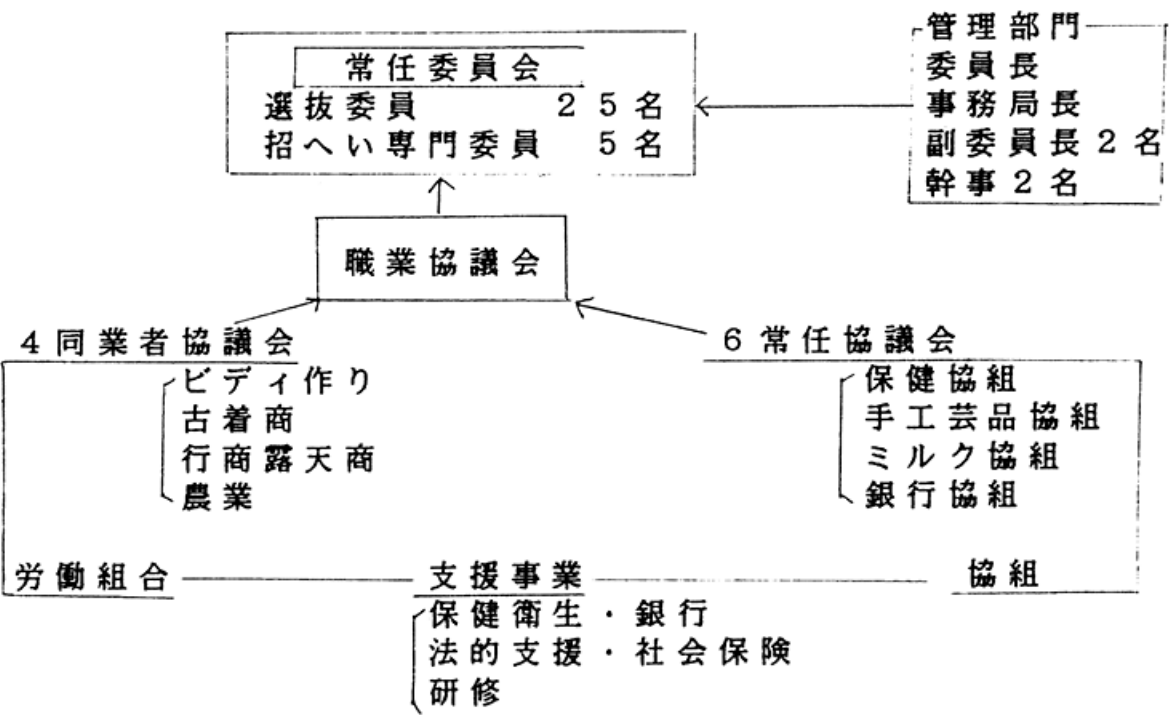


図2

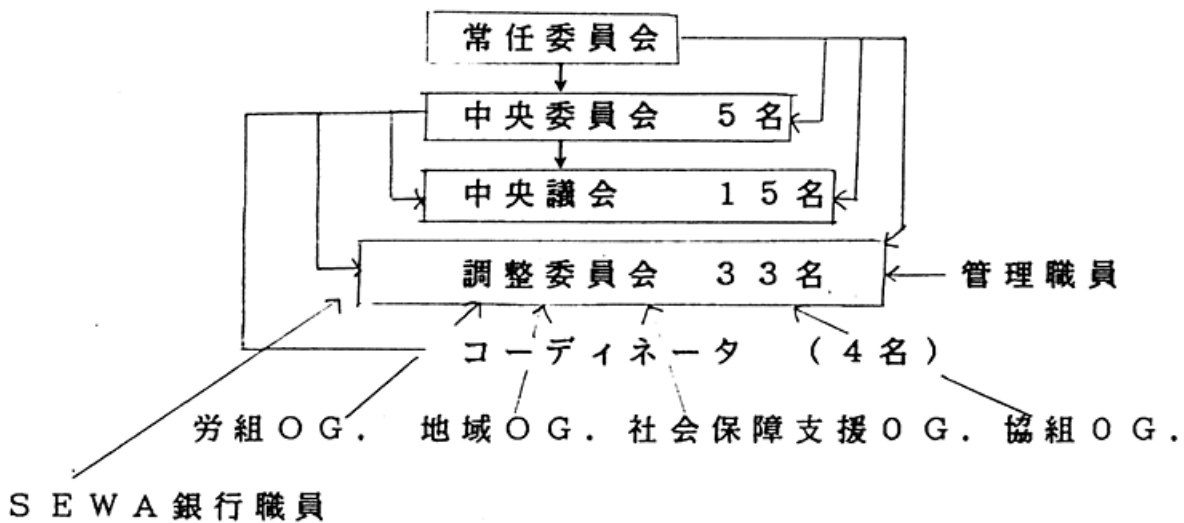


図3

彼らの運動の固有性は何と言っても、産業の近代化で周縁に追いやられる労働者を「Self-Employed 自営者」と名づけ、労働者としてのポジティブなアイデンティティを様々な運動過程を経て確立していった点にある。SEWAがその運動で目標とする会員のエンパワーメントとは、全会員の経済・社会的自立をさすものである。完全雇用と社会保障¹⁰を獲得する中で、意思決定力もつけていこうとするものである。このようにインフォーマルセクターの女性労働者が、自らの労働をSelf-Employed（自営者）として自己規定し、労働者としての権利や保障を労組活動を通じて獲得していこうとすること自体が、きわめて新しい労働概念であるといえる。

いわゆるインフォーマルセクターの労働は、インドの労働形態の93%（6割が女性）[Bhatt 1989:1061]を形成するにもかかわらず、正式に評価されることも無く、実際SEWAが労組として正式に認定されるまで数カ月を要した。これらがインドで広く行われる伝統的職業であるにも関わらず、組織化されない雑業層の労働を「違法な侵入者」とみなす英国法の残滓が作用しているとローズは分析する[Rose 1992]¹¹。

インド全体のインフォーマルセクターの労働状況改善を目指して、SEWAは政策変更を求めるロビー活動や、他の女性団体への支援活動を非常に重視している。また単に自己組織の権利獲得のみに留まらず、国内の「自営者」を代弁する運動も重視している。こういった独自の「Sangam（合同運動）」はトランスナショナルなレベルでも活発に展開され、多くの国際開発・労働機関の会議などで非組織化部門の労働者を代表し発言を行っている¹²。このように、インフォーマルセクターの労働者の直面する問題を、政治的に社会的に可視化させていく点がSEWA運動の持つ象徴的な側面であろう。

以上考察したように、SEWAの運動の特徴は、都市部および農村部で雑業層の労働につく貧困女性を対象に、その生活上のニーズの充足を基本課題にして自立的に活動してきた点にある。その言説は、「植民地主義と西欧の影響の遺制により周縁化されてきたインド的な生活様式と労働のあり方」[Rose 1992:30]を、逆にインド固有の経済文化としてポジティブに読み替えていく運動（交渉）プロセスであると言えよう。

4. オーガナイザーの開発言説

SEWAは会員主体の組織運営を理念的に強調してはいるが、その主導権は事務局長のイラ・バットを頂点とした高学歴で高カースト、中産階級出身のオーガナイザーらの構成する中核委員会（Core Committee）にあるといえよう。そこには労組運動家、研究者、ソーシャル・ワーカー、女性運動家、元IAS官僚、技術者らが含まれ、各々の専門性を活かしながら諸活動に携わっている。

オーガナイザーにおける開発観は、3.で既に論じた運動理念に基本的に集約されるものではあるが、4名の幹部の語りに現れるSEWA運動の文化的文脈をここで考察したい。

オーガナイザーのほとんどは、SEWA活動を始める動機として社会改革的な女性の地位向上運動への関心をあげている。彼らが語る開発とは闘争と一体となり、交渉力をつけ新たな選択肢を得ること（エンパワーメント）で、社会・経済的制約から女性を解放することを意味している。SEWAの具体的目標は、全会員の完全雇用と自立であり、前者は収入・食料・社会保障の確保であり、後者は経済的かつ意思決定における自立を意図するものである。

SEWAが依拠するガンディー主義は、女性の地位向上を目指すインドの他のNGOに共有されるものである。しかし貧困女性会員が主体のNGOであるという意味で、インド唯一の運動体である点を彼らは強調する。その主張を可能にしているのは、リーダーシップを発揮し活発に活動をする多くの最貧層の女性会員の存在であろう。

実際、中産階級出身のオーガナイザー達は、SEWA活動において「貧困層の女性」と初めての出会を経験している。そして協同作業の中から、彼女らの多くが自尊心を持ち、創造性に富み、洞察力を備え、勤勉・活発であることを新たに「発見」しているのだ。そして「貧困」とは様々な形で機会を奪われている状態であり、その潜在的な能力と可能性を引き出す機会こそ必要であることをオーガナイザーは強調している。更に、SEWAの多岐に渡る活動で、常に様々な課題に直面し、その都度決断と実行力が求められる状況をさし、エンパワーされているのはオーガナイザーも同様であると述べるメンバーもいる。

イラバットは、エンパワーされた女性会員のライフストーリーを数多く蓄え、それを強力な武器として用い対外的発言を行なっている。イラバットの語りで印象的であったのは、「皮肉に聞こえるかも知れないが、貧困女性のグループが国家政策を変えるための行動を起こせるよう、政府は女性グループの組織作りを支援すべきだ。」というコメントである。これはSEWAが政府と対立・協調の二重戦略を用い、開発の流れに関与しようとする姿勢を表すものといえよう。

一方、女性だけを対象に活動する理由として、イラ・バットは次の2点をあげている。1) パルダ（女性隔離）が重んじられるグジャラート州の文化的土壌¹³から、女性だけの方が組織化し易い点、また2) 「男性の前で女性は態度を変えてしまい、控え目になりリーダーシップが育たない状況」を避ける意味合を持つという。従って、時期を見計らって男性の入会を認める考えであることを強調している¹⁴。

5. 会員のライフヒストリーにみる開発言説の内面化過程

以下に掲げるのは、3名の非識字会員（仮名、いずれも50才代で組合設立当初から関与）のライフヒストリーの抜粋である。ここでのねらいは、彼女らが言説としてのSEWA運動を当事者として

いかに内面化し、いかなる自己アイデンティティを生成させていったのか、またその際、基層文化との葛藤がいかに調整され得るのかを見出すことである。

(1) タラベンの語り（指定部族：Vaghri、年齢推定55才、非識字、古着商

家族：夫－推定65才・無職、息子5人－学歴10年、娘1人－同4年）

SEWA設立メンバー。運営委員会委員、SEWA銀行理事などを経て、現在保健部門の監督者。イラ・バットに商売上のローンのことで面会したのが、SEWAを組織化していくきっかけとなる。また夫が工場を離職し、家計支持者となる経済的背景があった。

市当局の都市再開発計画による露店商一掃に抵抗した一人。当時顧客もでき、商売が軌道に乗り始めた頃で、警官の嫌がらせには絶えず悩まされていた。そのため市当局と渡り合ったり、最高裁判所で自営の女性を代表して証言したりした。

人集めがうまく、今まで入会させた会員は一万人を越える。演説能力も買われていて、集会や市当局との交渉の場には必ず行く。融資部門の起案者。会員の小遣いをプールして原資とすることを提案して成功、その後銀行の理事を19年間努めた。

8年前SEWAが保健部門を追加した時、関心を持ち保健婦養成の講習会（隔週一回、3年プログラム）に参加。伝統的な病・治癒観（邪視、願掛け等）から、西洋医学的な知識とのギャップに戸惑うことが多かったが、実践するなかでその効果を認め次第に見方が変わっていった。

家族、特に夫との関係は決して平穏なものではなかった。設立当初は時間が割かれることが多く、古着商に当てる時間が減り当然収入が減った。家事や育児にかかる時間も不十分で、夫から責められた。また親戚にも付き合いが悪いと非難された。そうした葛藤を乗り越えられたのは、エラベンの友情と子供達の励ましがあったからだ。自分自身SEWAでの活動が、子供の教育上良い影響を与えると思っていた。やがて自分達の活動が公的に報道されるようになってから、夫は理解を深め協力的になった。

自分が住むスラム地区を保健指導員として巡回しはじめた当初は、なかなか受け入れられず、非識字で医者ではない自分は非難中傷されることも多かった。しかし訪問を重ね、保健衛生の有益な情報を少しずつ伝え、救急患者の医療施設への搬入など地道な実践を重ねることで信頼を得て行ったと思う。

カーストについては、SEWA入会前は厳格に守り他カーストからは水を受け取らなかったし、交際を制限していた。しかし、高学歴のオーガナイザー達が他カーストからの水を飲み、その子供達を抱き上げるのを見たりしているうちに少しずつ柔軟になっていった。時間はかかったが、今ではカーストを否定している。

自分は強靱な精神と高い自尊心を持っていると言われるが、SEWAの活動に関わる中で体得した多くの知識が力・自信となりさらにそれを強化したと思う。今ではSEWAの活動には自分のビジネス以上に意義を見いだしている。それはイラバットとの友情や他メンバーとの連帯が強い動機を与えるからで、今後も自営女性のために尽したいと考えている。今週末もデリーに行き「六ヶ国蔵相会議」で「貧困女性への融資」についてスピーチをする。

SEWAの活動については、近年規模を拡大し若い世代が加わり、自分が創立メンバーとして多く

の苦労を重ねてきたのに、知らない会員が増えた。また高学歴のスタッフが多く採用されることで、自分を含めた非識字の会員はせいぜい地域リーダーになるのが精一杯のようで、その点が不安だ。

- (2) ベンジールビビの語り（ムスリム：Chhipa、年齢55才 非識字、元型染めの家内職人、現在型染め協同組合のコーディネーター、家族：夫－57才－リキシャ運転手、息子7人－学歴大学院1人、他12年以内、娘3人－2人死亡、学歴10年）

SEWA加入のきっかけは、経済的な理由から。その頃SEWAの組織化の一環として地域をまわり始めたオーガナイザーと出会った。宗教が異なる上位階級の女性が、なぜ自分達のような貧困層の生活に関心を持ち、入会を勧めるのか不思議に感じた。しかし再三の訪問が生活のあり方を考えるきっかけとなった。それ以前から経済的窮乏感を感じていて、娘に教育を受けさせるなどの浪費がどうしてできようか考えていた。またそれとは逆に、家の外にはまだ未経験の世界があることを知っており、オーガナイザーが来訪した時それを知る絶好の機会であるとも考えた。そしてSEWAの事務所を訪れ活動母体が確実なことを見届け、3か月の型染め講習を受ける決心をした。

講習内容は型染めと染料の調合であった。この講習を受けているうちに、これまで仲介斡旋人にただ一つの型木をあてがわれ未熟練労働をすることで、ひどく搾取されていたことが分かった。その後SEWA銀行から15万ルピーの融資を受け、協同組合を運営。市場調査や注文・契約方法など関連作業を習得し自信を得た。かつての仲介斡旋業者以上の知識・技能を持つ自分に価値を感じた。

夫は最初猛反対だった。SEWA入会後外出が増えたことで、夫は不貞を含む不測の事態を恐れた。当初、自分も外出に様々な危険が付きまとうと考えた。実際しばらく経つと、それは全く取り越し苦勞である事が明らかになるのだが。しかし子供達が敬意を持って自分とSEWAとの関わりを応援してくれた。また活動の実績を通して、夫は次第に協力的になり、今では毎日リキシャで送迎してくれるほどだ。収入は夫と同じくらいである。

カーストについては、SEWA入会后、指定部族の女性達の組織化への関与などを通しすべて平等だと考えるようになった。宗教については、それぞれが真理を含むものであり、私は自分の宗教にしたがって生活している。

SEWAの組織運営に関しては高学歴の女性達が多くなってきているが、彼女らは単にペーパーワークをするのみであり、実際の作業は私達貧困女性が行っている。だからどちらがどちらを支配するという関係ではない。しかし書類の中身をよく知らずにサインをするなど、非識字であるがための不安は否めない。

今後の展望としては、独立して手工芸協同組合を組織することだ。そして市場調査をしマーケットを開拓をしていきたいが、資金作りが問題だ。

- (3) ノルティベンの語り（指定部族：Vaghri、年齢50才、非識字、元野菜商、現在VIDEO SEWAのプロデューサー、家族：夫－54才－野菜商、息子4人－学歴－大卒、10、7年、娘2人－学歴なし）

SEWAとの係わりは、リーダーとして野菜売りの女性達を組織化し市当局による露店商一掃に抵

抗した時だ。自分達はここで何代にもわたって野菜売りをなりわいとし、固定客もあった。最初は恐怖で一杯だったが、生活を守るためストライキに参加したり、市庁舎、裁判所にまで出かけて抗議した。

VIDEO SEWAに入るきっかけは'84年に国連大学との協賛で、SEWAがビデオワークショップを開催した時だ。3週間の講習を受けたが、内容は記憶力だけが頼りで苦労した。機器については、形と色で接続法や操作を習得した。ビデオ制作という全く未知の世界に入ることは、かなり大胆な決断だったと思う。しかし家事育児と野菜売りの自分の生活は将来とも何等変化が無いものに思えたし、ここで何かを学び、役立つ技術を身につけたいと強く思ったからだ。

VIDEO SEWA（この名称を案出したのも自分である）のスタッフになってから、6-7本の作品を制作した。最初の作品は、自分の住んでいる郊外スラム地区（メガニナガール）の衛生事情を扱ったもので、タイトルは「一つの蛇口に100の水瓶」であった。スラムの女性達が水を確保するのに日常的にいかん苦労しているか、また共同トイレが慢性的に不潔で、いかに耐え難いものかという状況を淡々と映し出した内容だった。これはSEWAの中産階級出身のオーガナイザー達さえ衝撃を受け、さっそく市の水道局に送られた。これが自分達のスラムの給水と排せつ処理施設が改善されるきっかけとなった。

収入面から言えば、SEWAに入会し露店商としての障害がなくなり安定した。しかしVIDEO SEWAに入ってから減収になり、夫は不満だったが、子供達は逆に自分を応援してくれた。SEWAに関連して自分のビデオ作品やインタビューがテレビに取り上げられ始めた頃で、子供達はとても誇りに思っていたからだ。収入はその後増えている。

夫との関係は、理解も進みずっと良くなったが、外出がちになることに今も不満だ。しかし子供達が常に応援してくれる。また自分の住むスラム地区でこのように活動する人間はいないので、彼らの模範になることに心がけてきたし、それが自分の誇りにもつながっていると思う。

カーストはないほうがいい。しかし宗教は、社会の秩序と平和を保つために必要だ。自分も外出前は、必ず身を清め礼拝する。そしてどんな仕事をするにも、先ず神のことを常に考える。

教育はとても重要だと考える。非識字の自分でもビデオプロデューサーになれたのだから、基礎教育を受けていたらもっとよい仕事につけただろう。息子はそれぞれ大学、10年、7年と受けさせた。娘達は、家事をするので学校へはやらなかったが、二人ともちゃんと嫁いでいる。子供達には自分と同様にビデオ技術を学ばせてプロデューサーにしたかったが、経済的負担が多すぎて無理だった。

SEWAで活動を始めて以来、自分に起こった変化は、夫との関係が先ず挙げられる。それは他のメンバーも同じなのだが、それまでのように盲目的に夫に従うことが無くなった事だ。仕事をすることのアイデンティティ、それについてくる自己価値と自信に気付いたからだ。これからはビデオ制作活動を通して、貧困女性の問題を解消する努力をして行きたい。できれば独立して自分自身のプロダクションを作り、ビデオ制作の仕事をしたいが、経済的に無理だろう。

SEWAではより高学歴のスタッフが増えてきて、非識字の自分は仕事、特に編集をこなす上で常に困難と不安を感じる。

(4) 会員による開発言説の解釈

ここで取り上げた会員による語りは、出自、生業の別、SEWAとの関わり、今後の抱負など、三人三様のあり方を示している。しかし「自営者」として自己規定をし、組織化して労働者としての権利と保障を求め運動していく中で、エンパワーされてきた過程を各々が表明してはいまいか。

その過程には、会員が未経験であった組織的知識をも含めて、SEWAの運営メンバーの一員としての知識や新技術の獲得が含まれる。その一つが、タラベンやノルティベンに見られる近代テクノロジーの獲得である。

またSEWAの活動が国内・海外において関心を集めるにしたがい、非識字会員の活動も一労組内に留まらず、きわめてtransethnicな要素も関わるようになっていく。しかも彼女らは、そのような外来的要素をも享受しつつ、自らのエンパワーメントに利用しているように思われる。

前章でも述べたように、SEWAのリーダーであるイラバットは何百人という会員のライフストーリーに通じ、それらを巧みに運動言説の一部として活用する。その彼女の「SEWAには何千人者ものタラベンがいる。」という語りでも明らかのように、ここで取り上げた会員の語りが特殊なケースではないのである。

6. 結び

トルーマンが現代的意味を用いて「開発」を唱えた時、彼の念頭にあったのはただ一つの処方箋であつたらしい。そしてその処方箋に従えば、地球上の万人が「我々のような穏当な暮らし」を享受出来ると確信したのだろう。そのポイント・フォー計画から40余年。現代世界は、ボーダーレス化しながらも一方で多彩な文化的モザイクのピースを増やし続けている。そのモザイクの一片を、筆者はSEWAの諸活動に見いだしている。

SEWA運動は本流の開発言説に対し、また制度化されたWID言説に対して二重に抗するローカル言説として形成されてきた。その運動言説の形成過程を考察すると、前近代性、前植民地性を唱えたガンディー思想と共に、オーガナイザーの組織論を含めた高度な専門的知識、また法的提訴といった近代的手法がそこに見いだされ、きわめて文化的にハイブリッド（異種混交）化しているといえる。

SEWAの諸活動および当事者の語りが開発に対し示唆的であるのは、ローカル言説の形成が必ずしも伝統的な経済文化を全面的に内包するものではなく、それを様々な手法で正当化させようとする政治的ダイナミズムを伴う点であろう。会員の大部分を占める最貧層の女性の「自営者」としてのアイデンティティの形成過程には、伝統なるものと近代なるものの狭間で、巧みに対岸の手法を利用することをも含まれる。これらを合わせて考察していくと、彼女らは既存の開発言説に対抗する一方で、流用〔Clifford 1988〕しながら新たな「伝統」を創り出しているかのようによさ思われる。

その掛かりで、彼女らが捉えるジェンダー関係にも新たな概念がほの見える。なるほどSEWAは女性による開発集団である。しかしその活動の主眼は、イラ・バットが語るように男性排除の論理ではなく、貧困女性が経済・社会的に力をつける事でいかに新たな開発の流れを築けるかという点にある。SEWAが規定する「自営者」とは、産業の近代化の過程で生み出される保護されない労働形態の別名でもあり、それはジェンダーフリーに存在する。その意味で彼らが用いる〔女性〕というカテゴリーは、西欧＝近代の分離対立的ジェンダーカテゴリーとは異なる位置づけを持っている。ともすれば硬直化し、概念化の過程で自己崩壊の危機に直面しかねないカテゴリーではなく、アイデンティテ

イポリティクス、換言すれば「交渉の起点」としての「女性」というオープン・カテゴリー [Alcoff 1994:118] が読み取れるのではあるまいか。またその意味において S E W A 運動によりエンパワーされる女性会員は、自らアイデンティティを構築する主体として、これまでの西欧中心に作られる「第三世界の女性」という二重のスティグマを内包させた概念をずらし [Minh-ha 1989:186] ながら解体させる可能性を持っている。

冒頭の文化的モザイクに例えられるローカルな開発活動の民族誌を描くことこそ、本流の開発言説のほころびをぬって「第三世界」および「第三世界の女性」というフィクションを解体させる契機になるのである。

以上

[脚注]

- 1 例えばケニアのラム町在住の女性における「開発」と「近代」の概念調査では、彼女らは新旧様々な要素を彼らに利する形で再編し、変形していることが明らかになった。しかも取り込む新たな要素には、インド映画を含めた非西洋的なものも含まれる。
- 2 例えば米国開発庁における NEW DIRECTION 政策、および Social Soundness Analysis (SSA.) の採用など。国際開発パラダイムの変遷については、喜多村 (1993) を参照。
- 3 女性労働の可視化は、そのまま女性労働の改善を意味しない。それをミューラーは、第三世界で増加する F T Z (自由貿易加工区) における劣悪就労、米国の専門職における閉鎖性などをあげ指摘している。[Mueller 1991]
- 4 アフリカ文化協会主催の「アフリカの伝統における女の文明」をテーマとした会議における基調演説からの抜粋。ミンハは、その著作・映像活動において、第三世界の様々な女性達が、彼女達を劣位化する一般的見方を払拭する努力を数多く取り上げている。
- 5 Development Alternatives for Women's New Era.
- 6 この報告書で指摘されている点は、女性の低い識字率や就業率、慣習 (ダウリーなど) による束縛などである。
- 7 例えば、TRYSEM (村部における技術訓練プログラム) や DWCRA (農村女性児童開発プログラム) など。
- 8 この部分は、主に [Patel 1994] によった。
- 9 現在では一般的になりつつある貧困女性への小規模融資事業であるが、その先駆的機関を創設したこと、またそれが途上国のみならず、先進国のモデル (WWB: 世界女性銀行) となった点でも知られている。
- 10 但し SEWA が言う「完全雇用」と「社会保障」とは、最低賃金を遵守した安定した雇用と就労のための最低限の住居・食料の確保を意味している。
- 11 ローズによれば、現在のインド憲法ではあらゆる職業の平等を唱ってはいるものの、公教育の教科書の記述に未だこのような取扱が記述されているという。
- 12 例えば筆者が滞在中には、ILO に家内労働者条項の追加要求決議案を採択するためのアジア地域会議を主催している。

13 グジャラート州はヒンディベルトと呼称される北西諸州に文化的には包摂され、ヒンドゥ文化的要素の強い地域といえる。食文化を例にとると、禁酒州であり、下位・アウトカーストまでおしなべて菜食が行われる。

14 現に毎年年次総会でこれが議題として討議されるという。

但しSEWAの管理部門にはタイピスト、守衛、運転手としてすでに数名の男性が働いている。

[主要参考文献]

Agnihotri, I. & Mazumdar, V.

1995 Changing Terms of Political Discourse-Women's Movement in India,

1970s-1990s, Economic and Political Weekly, Jul.22:1869-1878.

Alcoff, Linda

1994 Cultural Feminism vs. Post-Structuralism:The Identity Crisis in

Feminist Theory. In Culture/Power/History ed.by N.Dirk,G. Eley, S.

Ortner Princeton Univ.Press:96-121.

バーバ、H. (Bhabha,H.)

1992(1986)「差異・差別・植民地言説」上岡伸夫『現代思想』20(10):61-79. (The Other Question.

In Russell Ferguson et al. (eds.), Out There, Cambridge, MA:MIT Press:71-87)

Bhatt, E.

1989 Toward Empowerment, World Development Vol.17, No.7.

Dahl, G. & Rabo(eds.)

1992 KAM-AP OR TAKE-OFF : Local Notions of Development, Stockholm Studies in Social

Anthropology, Dept. of Social Anthropology, Stockholm University.

Escobar, A.

1991 Anthropology and the Development Encounter:the Making and Marketing of Development Anthropology. American Ethnologist 18(4):16-40.

1995 Encountering Development : The Making and Unmaking of the Third World,Princeton Univ.

Press

フーコー、M. (Foucault, M.)

1980 Truth and Power.In Power/Knowledge, Colin Gordon (ed.) New York:Pantheon Books

Government of India

1974 Toward Equality : Report of the committee in the Status of Women in India.

New Delhi : Department of Social Welfare, Ministry of Education and Social Welfare.

1988 Shramshakti : Report of the National Commission on Self Employed Women and Women in the Informal Sector. New Delhi.

Hobart, M.(ed)

1993 An Anthropological Critique of Development : The Growth of Ignorance, London& N. Y. : Routledge.

伊藤るり

1995「〈グローバル・フェミニズム〉と途上国女性の運動」坂本義和編『世界政治の構造変動』4巻 市民運動 pp.47-84.

喜多村百合

1993「国際開発をめぐるジェンダーの諸問題」九州人類学会報 第21号 pp.30-40.

1996「インド貧困女性の開発言説受容に関する一考察－女性開発NGO・SEWA会員の語りを中心に」『アジア女性研究』第5号 pp.38-44

ミンハ、T.T. (Minh-ha, T.T.)

1995(1989)「女性・ネイティブ・他者」(竹村和子訳) 岩波書店 (Women, Native, Other, Indiana Univ. Press.

Patel, B.B.

1994 Displaced Textile Mills Labour, Redeployment Strategies and Regeneration of Local Economy-Dimension and Issues-The Case of Metropolitan Area of Ahmedabad. In Economic Changes and Social Transformation in Modern and Contemporary South Asia, ed. by T. Shinoda, Hitotsubashi Univ.: 297-328.

Rose, K.

1992 Where Women Are Leaders, Vistaar Publications, New Delhi

スコット、J. (Scott, J.)

1992(1988)「ジェンダーと歴史学」(荻野美穂訳) 平凡社、(Gender and Politics of History. Columbia Univ. Press)

SEWA

1987, 88, 89, 90, 91, 92, 93, 94, 95 SEWA Annual Report, Mahila SEWA Trust.

玉置泰明

1995「開発と民族の未来－開発人類学は可能か」合田涛・大塚和夫編『民族誌の現在』弘文堂 pp.88-106.

八木祐子

1992「インドの女性研究 (I)－その動向と課題(1970-1990)」宮城学院女子大キリスト教文化研究所紀要 vol.26, pp.125-157.